

# 天草版平家物語・伊曾保物語 言葉の和らげについての考察

清水 登

本稿は、天草版『平家物語』・『伊曾保物語』所収の字集『言葉の和らげ』の難語句の配列及び語彙について論考しようとするものである。本『言葉の和らげ』については、高羽五郎氏による翻刻『国語学資料』（昭和25年11月）と、林重雄氏による索引『天草版平家物語・伊曾保物語 言葉の和らげ語彙索引(-)(=)』（石川工業高専紀要、昭和44年3月—46年3月）があり、他に論考したものは、管見の範囲では見当たらない。

## 一 『言葉の和らげ』について

本『言葉の和らげ』（以下『和らげ』と称す）は、天草版『平家物語』・『伊曾保物語』の難語句をアルファベット順に配列し、日本語やポルトガル語の注解を添えた字集で、『平家物語』・『伊曾保物語』・『金句集』の三本が合綴された際（1593年）、巻末に付載されたものである。その序には、

この平家物語と、EsopoのFabulasのうちの分別しにくき言葉の和らげ

とある。このような『言葉の和らげ』は、『サントスの御作業』・『ドテリナ・キリシタン』・『ヒイズスの導師』・『コンテムツス・ムンデ』等にも付されているのである。注1

注1 森田武氏『天草版平家物語難語句解の研究』P.358

## 二 配列基準について

『言葉の和らげ』について難語句の配列基準を検討してみることは、イエズス会の日本語研究の実態を探る上で重要なことであろう。その方法として、『日葡辞書』<sup>註2</sup>の配列と、本『和らげ』<sup>註3</sup>の配列とを比較してみる。『日葡辞書』（1603年～1604年刊）は、キリシタン版の辞書の中で最も語彙数が多く、規範的であり、完成度も高い。その両者を比較することで、本『和らげ』の性格や問題点が明らかになるのではないかと考えたからである。

まず、両者の配列の概要を見てみよう。部立ては、本

『和らげ』17部（『P』部なし）、『日葡辞書』18部（『P』部あり）でアルファベット順になっている。ともに「E」「H」「K」「L」「O」を欠いて、「J」は「I」に合し、「U」は「V」に合している。

注2 『邦訳日葡辞書』（岩波書店）による。

注3 『天草版伊曾保物語』（勉誠社）所収の複製本により、林重雄氏作成の語彙索引を参照した。

## 1 上位分類について

各部の中で見出し語（難語句）の「第二字目の文字の配列」（以下「上位分類」と称す）がどのようになっているか見てみる。

（第一表、第二表は、各部について上位分類を整理したものである。ただし、合拗音、無声文字「u」など、第二字目で切れないものについては、第三字目の文字までの形で、母音「I」と子音「I」については区別し、括弧の中に示した。『日葡辞書』は「本篇」を調査対象とした）

### a 各「部」の検討

「A」部 『日葡辞書』については問題はないが、本『和らげ』において「y」と「z」とが倒置している。次に、その実態を示す（括弧内の左の洋数字は底本のページ数、右の洋数字はその段数を示す）。

Azaazato（鮮々と。103左1）

Azamuqi（欺き。103左2）Azauarô（嘲笑ふ。103左4）

Azzumavonoco（東男。103左7）

Azzusayumi（梓弓。103左9）Ayaxinofuxido（賤の臥所。103左14）Ayuminoita（歩の板。103左16）

「G」部 合拗音「Gua」の位置が『日葡辞書』では「Gu」の後であり、本『和らげ』では「Ga」に続いている。

また、「Gi」の位置も本『和らげ』ではアルファベット順にしているが、『日葡辞書』では最後尾にあって、恰も「ガ行音」（Ga～Gua）と、「ダ行音」（Gi）とに

本『和らげ』上位分類 (第一表)																	
A	B	C	D	F	G	I	M	N		Q	R	S	T	V	X	Y	Z
c	y	a	a	a	a	b	x	a	a		a	a	a	a	a	a	
d		e	h	e	e	(j)c	z	e	e	(ua)e	e	o	e	o	e	e	a
f		i	o	o	i	(j)e	y	i	i	(uo)i	i	o	o	c	i	c	o
i		o	u		o	(j)i		o	o		o		ç	n	o	d	u
m	u				u	(j)m		u	h		u			o	o	g	z
n						(j)n			o					q	m	n	
p						(j)o			u					r	p	n	
q						(j)q								s	p	q	
r						(j)r								t	q	t	
s						(j)s								x	t	x	
t						(ua)								y	x	o	
v						(j)u									o	u	
z																	

  

『日葡辞書』上位分類 (第二表)																	
A	B	C	D	F	G	I	M	N	P	Q	R	S	T	V	X	Y	Z
a	t	a	a	a	a	s	a	a	a	e	a	a	a	a	s	a	a
b	u	e	h	e	e	(ue)b	t	e	e	i	e	o	ç	b	t	e	e
c	x	i	o	o	i	c	u	i	h	o	i	u	e	c	u	i	f
d	y	o	u		o	d	x	o	o	(uo)i	o		o	d	x	o	z
f	z	u		u	u	f	y	u			u			g	y	u	
g					(ua)i	g	z							(j)z			
i					i	(j)i	(j)a							n	n	o	
m					(j)m	(j)m	je							o	p	q	
n					n	n	jo							p	q	r	
p					p	p	ju							r			
q					q	q											
r					r	r											
s					s	s											

整理されているような配列になっている。注4  
 「I」部 『日葡辞書』は、語頭の「I」について、母音「I」を先に置き、子音「I」を後に置いている。ところが、本『和らげ』は、「I」の母音・子音を区別することなく、アルファベット順に置いているのである。また、「A」部と同様に「Y」と「Z」とが倒置しているのである。次に、その実態を示す。

Izasavozasa (い笹小笹。118左26) Izzuchi(何方。118左28) Iyamaxini (弥増に。118左29)

「N」部 『日葡辞書』はアルファベット順であり問題はないが、本『和らげ』の場合、「No」の語群の中に「Nh」が入り込んできている。次に、その実態を示す。

Nonoxiru (罵る。122左22)

Nhôgo (女御。122左26) Nhôin (女院。122左27) Nhoxô

(女性。122左29) Noqecabut (仰兜。122左30)

「Q」部 『日葡辞書』はアルファベット順である。本『和らげ』においては、合拗音『Qua』が「Qe」の前に置かれ、アルファベット順を狂わせている。

「T」部 「Tç」について、『日葡辞書』は「C」の期待されるべき位置に配列しているが、本『和らげ』は最後尾に配列しているのである。

「V」部 『日葡辞書』はアルファベット順であるが、本『和らげ』は、「Va」の後に「Vo」を置き、アルファベット順を狂わせている。次に、その実態を示す。

Varinai (理無い。132左1) Varubire (悪れ。132左2)

Vayacujin (わやく人。132左4)

Vöban (大番。132左6) Vöbô (王法。132左9)

上の例の「Vo」はともに開長音の「Vö」で、意識の上では「Vau」と理解され、「Va」の後に混入されてしまったとも思われるが、「Vo」の混入例は、上の2条だけでなく、開長音記号の付かない「Vo」を含み、その後に39条収められているのである。

「Y」部 『日葡辞書』はアルファベット順であり問題はないが、本『和らげ』においては、「Ya」以下、「Ye」「Yc」「Yd」と続き、アルファベット順を狂わせている。次に、その実態を示す。

Yetçubo (笑霊。139左26) Yexacu (会釈。139左27) Yoca (一家。139左28) (21条) Ycon (遺恨。139右30) Ydö (医道。139右31) Yguiöfuxigui (異形不思議。139右32)

「Y」部全体からすると、「ya・ye・yo・yu」の「ye」と「yo」の間に、「Yc」「Yd」「Yg」「Ym」「Yn」「Yp」「Yq」「Yt」「Yx」が挿入されているかたちになっている。その挿入部分に、語頭母音「イ」に「Y」の表記を用いた例(すべて漢語)が37条収められている。「I」部には、語頭母音「イ」に「I」の表記を用いた例(和語が多い)が35条収められている。森田武氏はこの問題に触れ、パレトの『天草版平家物語の書き入れ』や同『難語句解』において、原本の語頭母音「イ」が「Y」から「I」に書き換えられていることを指摘して、イに始まる語句がJ、Y両部に分属しては検索上不便であることをおもんばかって、J部にまとめて掲げようとの意図があったものと考えられる。

と述べておられる。<sup>注5</sup>

『日葡辞書』の「Y」部には、

Yfi (爛皮) Yfö (異邦)

の2条を収めている。この2条について、森田武氏は抹消すべきものが落とされたものとしている。<sup>注6</sup>

また、『コンテムツス・ムンヂ言葉の和らげ』<sup>注7</sup> (1596年刊)の「Y」部にも、

Yqiö (異香) Ycai (位階) Yquö (威光)

の3条を収めるのみである。その「I」部には、「I」表記の例が16条もある。このような字集・辞書の例と比較してみても、本『和らげ』には、語頭母音「イ」を「I」部・「Y」部どちらかにまとめて掲げようとの意図は見られないのである。

注4 土井忠生氏は『日葡辞書』の「G」部の特異な配列について指摘しておられる。『吉利支丹語学の研究』P.80

注5 『天草版平家物語難語句解の研究』P.294

注6 『邦訳日葡辞書・補説』P.847

注7 林重雄氏の『改編1596年版コンテムツスムンヂ言葉の和らげ(一)(二)』(石川工業高専紀要四・五)の翻字本による。

## b 上位分類のまとめ

前節では、『日葡辞書』と比較しながら、本『和らげ』の上位分類について検討してみた。各部を通して問題の主なところを整理してみると、次のようになる。

### A 「A」部、「I」部

「Y」と「Z」とが倒置していること。

### B 「G」部、「Q」部

合拗音「Gua」,「Qua」の位置には問題があつて、「Gua」は「Ga」の後に置かれ、「Qua」は「Qe」の前に置かれ、ともにアルファベット順に従っていないこと。

### C 「G」部

「Gi」の位置の位置には問題があつて、『日葡辞書』では最後尾に置かれているが、本『和らげ』ではアルファベット順に配列されていること。

### D 「I」部

母音・子音の「I」を、『日葡辞書』は区別して分類しているが、本『和らげ』にはそのような配慮が見られないこと。

### E 「T」部

「Tç」の位置には問題があつて、『日葡辞書』では「C」の期待されるべき位置に配列されているが、本『和らげ』では最後尾に置かれていること。

## 2 下位分類について

前章において、本『和らげ』の上位分類の問題点を整理してみた。それでは、上位分類での問題が「第三字目以下の配列」(以下「下位分類」と称す)ではどのようになっているだろうか。問題別に検討してみることにする。

### a 「Y」と「Z」との倒置について

「Y」と「Z」との倒置について下位分類の実態を示すと、次の通りである。

〔上位分類と同じもの〕

① Cöza (高座。108左8) Cozoru (舉る。108左10) Cözüi (洪水。108左11) Cözuru (?。108左12) Cöyebutmiö (更衣仏名。108左14) Cöyö (紅葉。108左17)

② Füzocu (風俗。114左5) Fuyö (不用。114左6)

③ Xizai (死罪。136右7) Xizucocoronö (静心無う。136右8) Xizuzatçumagui (賤が爪木。136右10) Xizzuqeö (静けう。136右12) Xiya (しや。136右13)

- ④ Yozacari (世盛り。141左15) Yôy (用意。141左16)  
 ⑤ Yuzzuru (弓弦。141右16) Yûye (?。141右18) Yu-yuxijcoto (由々しい事。141右20)

上の5例を見出すことができる。すべて「Y」と「Z」とが倒置しているのである。そして、アルファベット順に配列された例は見出せないのである。

b 合拗音「Gua」・「Qua」について

合拗音「Gua」・「Qua」について下位分類の実態を示すと、次の通りである。

〔上位分類と同じもの〕

- ① Fôquauoaguru (烽火を上ぐる。113左3) Fôqen (宝剣。113左8)  
 ② Fuquai (不会。113右16) Fuqêô (払腕。113右18)  
 ③ Xenquabanquanotamamono (千類万類の賜。134右18) Xenqinmanguin (千金万銀。134右20)  
 ④ Xiguan (志願。135右1) Xigurôdemyuru (しぐらうで見ゆる。135右2)  
 ⑤ Zaiquanivoconô (罪科に行なふ。141右28) Zaiqiôs-uru (在京する。141右30)

〔上位分類と異なるもの〕

- ① Xigo (死期。135左31) Xigocujinjin (至極深甚。135左32) Xiguan (志願。135右1)  
 ② Xucugô (宿業。137右20) Xucuguan (宿願。137右22)  
 ③ Zaiqe (在家。141右26) Zaiquanivoconô (罪科に行なふ。141右28)

以上の結果から見ると、本『和らげ』の上位分類通りであるものが5例、異なるものが3例である。

したがって、合拗音については上位分類と下位分類とが必ずしも合致しているとはいえないのである。

c 「Gi」について

「Gi」について下位分類の実態を示すと、次の通りである。

〔上位分類と同じもの〕

- ① Côgi (小路。107左27) Cogoyeni (小声に。107左28)  
 ② Fiôgiôuotazzusayuru (兵仗を携ゆる。111左29) Fiôgui (評議。111左32)  
 ③ Iôgiü (常住。117右6) Iôgouana (情強な。117右7)  
 ④ Nigin (二陣。121右26) Nigô (二行。121右27)  
 ⑤ Riôgisuru (療治する。125右32) Riôgiô (両条。126左2) Riôgocu (両国。126左4)  
 ⑥ Xengin (先陣。134右10) Xengiô (戦場。134右11) Xengui (金蔵。134右12)  
 ⑦ Ychigin (一陣。139左31) Ychigiô (一文。139左32) Ychigo (一期。139左33)

〔上位分類と異なるもの〕

- ① Quanguio (遣御。123左4) Quangun (官軍。123左7) Quangio (官女。123左9)

本『和らげ』の上位分類通りであるものが7例、異なるものが1例である。「Gi」については上位分類と下位分類とがほぼ合致しているといえる。

d 「Tg」について

「Tg」について下位分類の実態を示すと、次の通りである。

〔上位分類と異なるもの〕

- ① Catayenicoyeta (傍に越えた。105右11) Catçuninoru (勝つに乗る。105右14) Catocu (家督。105右16)  
 ② Futayori (二寄。113右23) Futçü (普通。113右26) Futennoxita (普天の下。113右27)  
 ③ Itade (痛手。117右28) Itçutonô (何時と無う。117右29) I(t)çuxica (何時しか。117右31) Itçuzoya (何時ぞや。118左1) Itoçêômonagueni (最興も無げに。118左2)  
 ④ Masumasu (益々。118右20) Matçucaje (松風。118右21) Matdai (末代。118右23)  
 ⑤ Vtçutçu (現。133右12) Vtocaranudoxi (疎からぬ同士。133右14) Vtocu (有徳。133右15)

いずれも本『和らげ』の上位分類と合致していないのである。用例②、④から帰納してみると、ともに「C」の期待されるべき位置に配列されているのである。そのことは他の3例についても矛盾しないのである。

3 本『和らげ』における配列基準についてのまとめ

A 「Y」と「Z」との倒置関係は、上位分類・下位分類通して見られるのであって、アルファベット順に配列された例は見出せないのである。

B 「Tg」については、上位分類では「T」部の最後尾に置かれ、下位分類では例外なく「C」の期待されるべき位置(『日葡辞書』と同様の位置)に配列され、上位分類と下位分類とが相違しているのである。

C 合拗音「Gua」・「Qua」については上位分類と下位分類とが合致しているとはいえないのである。

D 「Gi」については上位分類と下位分類とがほぼ合致しているのである。

合拗音「Gua」・「Qua」及び「Gi」について下位分類における用例をまとめると、次の表ようになる。表を分析してみると、合拗音「Gua」と「Qua」について、

	(合拗音)	(Gi)
上位分類	ua→e・i・o・u・ G・Q	i→o・u・ G
下位分類(上位分類 と一致するもの)	ua→e・i・u G 1例 Q 4例	i→o・u 7例
下位分類(上位分類 と相違するもの)	e・o→ua G 2例 Q 1例	u→i 1例

上位分類と下位分類における相違度は「Gua」が高く、「Qua」はそれほどでもない。また、上位分類と下位分類と相違させている要因として何か考えられないだろうか。この表に採られた用例は全部で16であり、上位分類通りの配列に従ったとすれば、アルファベット順に配列されなければならない用例「Gi」(8例)の全用例に占める割合は50%である。ところが、下位分類においてアルファベット順に配列された用例は10である。全体に占める割合は62.5%となり、下位分類で実際にアルファベット順に配列された比率の方が高い。下位分類における相違に、アルファベット意識が一つの要因として関与していたのではないかと思われる。

#### 4 本『和らげ』における配列基準(上位分類)についての検討

##### A 合拗音について

上位分類で、合拗音「Gua」が「Ga」の後に置かれたり、「Qua」が「Qe」の前に置かれたりしている形態は、配列の順序として不自然な感じがする。これはどういふことなのだろうか。

当時の合拗音について、森田武氏は『天草版平家物語におけるバレットの自筆写本』より、次のような例を示し、

① (gua・quo→ga・co)と表記された例

ganso (元祖) daýcóméō (大光明) qóday (広大) Xenco (先皇) gaybun (外聞)

② (ga→gua)と表記された例

guanquo (眼光) nanguan (難艱) quèguare (穢レ) aguarazu (上ガラス) guansocu (顔色)

①の例を合拗音の直音化現象によるもの、②の例をその可逆現象によるものと説明し、

たとえば、日葡辞書にさえ、Quannoqi(貫ノ木)を取めた一方に Qicannoqi(木貫ノ木)があり、「瓦解氷消」

を Gaguefeðxòとした例がある。一般の口頭語にあっては、それだけ直音化の傾向が強まっていたのである。

と述べておられる。注8

よって、合拗音「Gua」・「Qua」と直音「Ga」・「Qa」(表記としては『Ca』である)とが近い音としてとらえられ、「Gua」が「Ga」の後に、「Qua」が「Qa」の位置に配列されてしまったと考えるみたらいかがであろうか。

また、『コンテンツス・ムンデ言葉の和らげ』注9に、次のような例がある。

Yqiö (異香。14右14) Ycai (位階。14右17) Yquö (威光。14右18)

直音「Ca」が合拗音「qua」の期待されるべき位置にある。本例は、「Ycai」を「Yquai」と誤認した可能性を示すものであり、「qua」が「ca」の位置にたちうる傍証例として考えておきたい。

##### B 「Tç」について

「ç」について、上位分類でなぜ「T」部の最後尾に配列されたのであろうか。本『和らげ』の下位分類と『日葡辞書』においては、「C」の期待されるべき位置にあるのである。(第一表)によると、「Tç」の前は「To」である。「ç」を何かのアルファベットの文字と考えていたとすれば、

(条件) 「ç」は、アルファベット順において「O」以下の文字であること。

とすることができる。

森田武氏の指摘に、次のような例がある。注10

Muçabori, u (35右17)

Tamazzuça (55右9)

(『バレットの天草版平家物語難語句解』)

本例は、「ç」が「S」と同様に使用されたことを示している。ロドリゲスも日本語の「サ」・「ス」・「ソ」の文字として「S」を用いるのは不適切であり、「ç」であるべきだと述べている。注11

したがって、本『和らげ』の編者が上位分類においてのみ「ç」を「S」の位置に配列してしまったと考えるみたらいかがであろうか。

注8 『天草版平家物語難語句解の研究』P. 300

注9 林重雄氏作成の翻字本による。

注10 『天草版平家物語難語句解の研究』P. 301

注11 土井忠生氏訳『ロドリゲス日本大文典』P. 228

##### 三 日本語による注解語彙について

本『和らげ』・『日葡辞書』の見出し語(難語句)には、日本語による注解が付されている(本『和らげ』に

はほぼ全部に、『日葡辞書』には語によって)。その注解語彙について考察してみる。

本『和らげ』と『日葡辞書』の日本語による注解語彙を検討するため、似通った注解法をとっているものを選び、次に示す。

<見出語>	<和らげ>	<日葡辞書>
①Anracu (安楽)	Yasūtanoximu	Yasuqutanoximu
②Anvō (安穩)	Yasūvodayacana	Yasuquvodayacana nari
③Busō (無雙)	Narabimonai	Narabinaxi
④Cōgue (高下)	Tacai, ficui	Tacaxi, ficuxi
⑤Goxōjēnxo (後生善所)	Nochinoyonite- noyoitocoro	(jēnxo) Yoqitocoro
⑥Mōco (猛虎)	Taqeitora	Taqeitora
⑦Qichirei (吉例)	Yoitamexi	Yoqitamexi
⑧Qinjunofito (近習の人)	Sobachicōyrufito	(Qinju) Chicaqunarō
⑨Rōyacu (良薬)	Yoicusuri	Yoqicusuri
⑩Yenrio (遺囑)	Touoivomonbacari	Touoqivomonbacari
⑪Yōxō (幼少)	Itoqenai	Itoqenaqu, Itoqenaxi

注解語彙について両者を比較してみると、本『和らげ』には音便形(イ音便・ウ音便)が使われ、『日葡辞書』にはそれが無い。このような違いは、両者の性格(本『和らげ』—口語性、注12『日葡辞書』—規範性・文語性)に基づくものであろうか。

また、本『和らげ』の見出し語そのものについて検討してみる。『日葡辞書』には「語の優劣を記した注記」がある。その注記によると、本『和らげ』の見出し語は、次のような結果になる。

<「和らげ」の見出し語>	<「日葡辞書」の注記>注13
① Cocumo (国母)	Cocuboの方がまさる
② Cucqionotetare (究竟の一)	Cuqiōとも言い、むしろの方がまさる
③ IengonIenji (善言一)	Ienguenと言う方がまさる

④ Iōgouana (情強な)	Iōnocouaiと言う方がまさる
⑤ Mefajiqisuru (目弾きする)	Memajeと言う方がまさる
⑥ Mudaini (無体に)	Mutaiと言う方がまさる
⑦ Quanjōuo Cōmuru (勅賞を蒙むる)	Qenjōの方が本来の正しい語である
⑧ Tenbat (天罰)	(Tenbat・Tenbachi) Tenbatと言う方がまさる

⑧の用例を除いて、他の用例(①~⑦)は、『日葡辞書』の注記により「劣語」と判定されてしまっている。このことは、本『和らげ』(天草版『平家物語』・『伊曾保物語])の言語がいかに口語的色彩の強いものであるかということを暗示するものであって、従来の「キリシタン版」についての言語観を支持するものである。

注12 森田武氏は「パレトの注解法」に触れ、その語彙収集の方法として、教師の説明を聞いたものや、身近な日本人に尋ね書きとめたものが少なくないであろうと推定しておられる。『天草版平家物語難語句解の研究』P.358

注13 『邦訳日葡辞書』の邦訳による。

#### 四 むすび

前章までの検討によって、本『和らげ』における配列基準並びに語彙の実態が窺えたと思う。それにまつわる試論も付しておいた。語彙については、口語的色彩が強いこと、卑語の類を多く収集していることなど指摘できた。ただし、注解語彙の音便形については、『日葡辞書』に音便形が全く使われなかったというわけではなく、本『和らげ』と『日葡辞書』との表現上の傾向という程度にとどめておきたい。

また、上位分類と下位分類との不整合な面をどのように考えるべきか、今後の問題として残ってしまった。今回は事実のみ指摘しておき、残る問題については、後日を期したいと思う。